選考委員講評

石下　典子（詩人）

絵を別物に見せる魔術と

第16回から選考委員を務めさせていただきます。応募総数およそ７，０００を例年維持していることは全国規模に企画趣意が浸透している証左であろうと思うと同時に、充実させる立場であることに意を強めました。心に豊かさをもたらす芸術文化活動は、児童から高齢者まで何ものにも妨げられることなく社会とつながっています。応募作を読むにつれ、その実践的な潮流を実感しました。そもそも一枚の絵にストーリーを付けるのは簡単なことではありません。その中で既視感のない固有の着眼に優れた作品を。この視点で絞り込みに入りましたが、新規委員にとってここが最難関で、僅差の迷いは文筆力の優劣ではありませんでした。すなわち、しんみりと心に沁みるストーリー、絵を別物に見せるような魔術があれば揺るぎない応援をしたい。そんな作品が多数あったのです。

小中学生の部大賞・横道玄さんの「カッパの世界では」の長さの単位、全てアバウトというユーモア力とともに、社会通念の絶対性を打ち破る痛快さがあります。想像上の生物である点も、絵には見えていない世界観を繰り広げるための設定で、川のどこかにカッパ村が存在するようなひねりがありました。また「ゆめのきかんしゃ」菅谷真弘さん（小一）は実に自然体で、今しか書けない貴重な作品です。読み手の屈託まで払拭させる筆力に自信を持って書き続けてほしい一人です。

一般の部大賞・若林麻衣さんの「大きな子ども」は長い時間軸をうまくまとめ上げた作品。〈ぼくらの世界はまぁるかった〉が象徴する幼年期は後半の飛躍で反映され、まぁるい世界を持ち得ていた経験は成人しても心の支えであることを示した上で、タイトル効果がすばらしい。「岸辺の柳」桜山育子さんは結び柳の由来をまじえた工夫が際立っていましたし、「退職の日」好未来さんは経年が主題を磨いたと言える作品で、幅広い年代が応募できる「１ページの絵本」の意義は大きいと言えます。

末尾に、小中学生の部に散見された黄泉や三途の川の例は、少なからず心に引っかかったこととして挙げておきます。プロットを作る時点で、明るさや希望にあふれる主題が望ましいという私見とともに。

選考委員講評

一色　悦子（児童文学者）

高校生の声も聴きたい

今現在、世の中を取り巻く風景に目をこらして、ことばを紡いでほしいと願います。

私は、しっかりあやうい風をとらえている作品に強くひかれました。

小中学生の部、中学三年生の「夢の世界と現実の世界」。列車に日の丸を振って見送った時代を書いているのです。行く先は黒い雨の降る世界。幻のトンネルを抜けたら平和の世界が待っているのかなあと、希望を伝えています。

一般の部では、「夢と希望とのぞみを乗せて」。キラキラしたことばにあふれているのに、銃弾を星々に変えて散らせ、平和の軌道を走れと、厳しい現実をうたっています。どちらも、夢ということばを使っています。夢とあらわすしかない、誰もが望む切実な願いです。戦いが起きたら、絵本も本も、座って穏やかに読めません。

７,０００に及ぶ応募作の中から、選考委員みんなで選んだ大賞・準大賞の皆さん、おめでとうございます。じっくり候補画を見て、絵にない物語を、じぶんのことばで３００字にまとめ上げた結果です。

幅広い年代からの応募は、それぞれこの時にしか書けない特徴があって、世界を広げてくれます。

昭和 22 年、この渡良瀬川を襲ったカスリーン台風のことを伝えてくれた「虹」。「びせいぶつ」にんげんのふりをしてふねに乗っていた虫たちが、池が汚くなっているのを見てお掃除します。よかったね。すごい！　「いぬのポチいばらきをめざす」ふねに乗れないので走って鬼退治に向かいます。この小学一、二年のユニークな発想の物語は、読んでいてとてもうれしくなる。

高校生の皆さん、たくさんのご応募ありがとうございます。「未来が其の胸中に在る者、之を青年と云ふ」ということばに出会ったばかりです。次の時代を作るのは高校生たちです。何に関心がありますか。一枚の絵にあなたの関心を引き寄せて思考して、未来を想像してほしい。この絵の機関車も舟も、きっとどこかに向かっています。いろいろやることはいっぱいあるだろうけど、ひと時、絵本を作ることはかっこ悪くないですよ。入賞作品集を読んで、多彩な色にあふれた１ページの絵本を面白いと感じてください。

選考委員講評

沖　ななも（歌人）

ひとつから多彩さを生み出して

一枚の同じ絵を取り上げるとしても、どこを中心にするか、それぞれ視点が違う。たとえば一艘の舟が描かれている絵。舟に乗っている人、走ってくる人、傍にいる犬、あるいは川のほとりの木。また、出発するところと見るか、帰着したところと見るか。あるいは遠くに見える鳥居を中心にした物語の展開もあった。電車ごっこをする絵では、現実の子ども、未来の子ども、過去の子どもとして設定する作品もある。巨人という見立て、人形という見立てもある。手前の一人の子どもを駅長と見るか、仲間外れと見るか、まったく逆の捉え方をしている。その多彩さが作品の多様さを生み出している。

一般の部。「大きな子ども」は、子ども時代の物語が後半には大人の目に一転したことで深い作品になった。戦争を意識し、平和を希求する作品も多かった。「夢と希望とのぞみを乗せて」は、汽車が平和に向かっているという捉え方で、詩のようなリズム感も心地よいものだった。「七番目の男」は、舟に乗る人が七人いるところから七福神を連想した、ユーモラスな作品。神さまなのだが俗っぽいところに親近感を抱かせる。

小中学生の部の「カッパの世界では」は、とてもユーモラスな作品に仕上がった。絵に描かれた舟は長さの単位にしか使われていない。カッパは架空の生物だからか、アバウトな世界観を持っている。「正転世界への旅」は、水に映る反転世界から脱出しようとする、幻想的でありかつ哲学的な作品。チャンスは雨の日に限られていて、その瞬間に期待する迫力を持つ。「自由」は、大切にされていることと縛られていることを区別できなかった私。自由の意味を深く掘り下げて人生を考えさせる作品。

戦争を意識した作品が多かったのは世界情勢をふまえてのことだろうか。小学生でも、私たちの暮らしは世界の出来事と繋がりがあることを感じているのだろう。また舟の絵では黄泉の国に行くというイメージを持った作品も多かったが、これも不安感の表れかもしれない。それと同じくらいに未来を見据えた作品も多かった。未来が輝いている、輝いて見えるというもの。空想的な作品にも希望が詰め込まれている。これは二人の絵の作者が意図したものだっただろうと思う。

選考委員講評

金田　卓也（大学教授）

イマジネーションと文章の構成力

今年の夏は例年にない暑さが続き、秋風が吹き始めるのを心待ちにしていましたが、秋の気配よりも早く「１ページの絵本」の応募作品が届きました。今年も小中学生の部への応募は多く、「１ページの絵本」の裾野が確実に広がっているのを実感します。とくに、一年生や二年生といった低学年の作品の中には、自分の生活に結びつけながら素直な気持ちで綴ったものが多くありました。

小中学生の部は、学校を通した応募が大半を占めますが、こうした物語の創作が学校教育の一環として行われることはとても大切なことだと思います。実際の社会ではいわゆる説明文に代表さる論理的な文章というものを書くことを求められる場合が多いのですが、物語の文章というものも論理的に練られた文章と本質的に異なるわけではありません。

小説もそうですが、最初から最後まで正にきちんと筋が通ったものが読んでも面白いのであって、論理的構成を無視して支離滅裂に書かれたものは話の筋を追うこともできないでしょう。その意味では、「１ページの絵本」の創作のためには、イマジネーションと共に文章の構成力というものも必要になってきます。

一般の部大賞を受賞した若林麻衣さんの『大きな子ども』という作品は、一緒に遊んでいた頃の三人の子どもたちの心の世界と時を経た自分とを交錯させています。一般の部準大賞の田邉ヨシ子さんの『夢と希望とのぞみを乗せて』では、部屋の中の子どもたちの遊びの世界が宇宙にまで広がっていきます。

小中学生の部大賞受賞作品、横道玄さんの『カッパの世界では』は、岸辺の風景からユーモラスなカッパの世界へと誘います。小中学生の部準大賞の高松歩花さんの『正転世界への旅』は、「反転世界」と「正転世界」というパラレルワールド的なイメージを論理的な矛盾を感じさせないで表現しています。

今回の選択候補画は屋外と室内という違いはあっても共に写実的な画風です。小中学生の部、一般の部共に大賞と準大賞受賞の作品では、写実的に描かれた日常世界がファンタジー世界と違和感なく結びつけられています。しっかりとした文章の構成力があってこそ、詩的なイメージや想像力によって広がるファンタジー世界を表現することができるといってもよいでしょう。豊かな想像力と創造力によって「１ページの絵本」がますます発展していくことを願っています。

選考委員講評

佐怒賀　正美（俳人）

想像力と物語の展開力

今回も大勢のご応募をいただきたいへんうれしく感じました。秋の星空から特にきらめく星を探し出すような、わくわくする選をさせていただきました。

小中学生の部、今回の大賞は横道玄さんの「カッパの世界では」。なるほど中学一年生らしく、正確性を要求しすぎる現代社会を軽くいなすような「アバウトな世界」をカッパの世界を借りてユーモラスに描かれました。アバウトな世界の居心地のよさは、郷愁のように寛げる世界でもありました。準大賞は高松歩花さんの「正転世界への旅」。「正転世界」「反転世界」の内容がけっこう難解ですが、「正転世界」への旅が一つの通過儀礼性を帯びていて、なかなか現代的なファンタジーでした。入賞作の中で私が感心したのは、酒井百合子さんの「心の島」でした。小さな女の子が和船のおじいさんから「心の島」の話を聞くという物語。課題の絵の沖に見える小さな島が喜びと悲しみの二色になるという発想もユニークで、さらには話をしてくれたおじいさんも、実は悲しみから立ち直ろうとしていたのでした。最後の光がそれをよく物語っています。見事な伏線でした。もう一作は、諏訪結子さんの「おいていかれたおとうさん」です。これは小学一年生らしいゆかいな発想の物語。おとうさんが朝からおまんじゅうを食べすぎて、おなかがいたくて、舟のしゅっぱつにおくれそうになったとは。こんなしっぱいをするお父さん、私もだいすきです。

一般の部の大賞は、若林麻衣さんの「大きな子ども」でした。私も一押しの作でした。前半では子ども時代を独自の視点から分析し、読者を引き込みます。そして、後半では一気に夢か現実か不可分の世界が急展開。内容に即した文章力もあり、文章も勢いを保ちながら見事な物語の終結へ向かいます。準大賞は、田邉ヨシ子さんの「夢と希望とのぞみを乗せて」。戦争のニュースが飛び交う今日的な空気に身を置きながら、平和への希求が詩的な物語で構成されていました。入選作の中で私がいただいたのは、桜山育子さんの「岸辺の柳」、なんさくさんの「夜祭り」、花園メアリーさんの「邂逅」でした。「岸辺の柳」では、旅人との別れと再会が柳の視点から描かれています。「柳の枝の輪」も要として静かに働いています。「夜祭り」では、あやかし祭の設定の面白さが光りました。また、「邂逅」では、序破急的な流れによって、少年タケルの正体が明かされる展開に惹かれました。